

英語と日本語の話法

松尾文子

1. はじめに

話法は他人のことばを報告者の談話に導入する手段である。報告者自身の過去の発話、あるいは発話ではなく思考を伝える場合もある。発話に関する発話であるといえる。発話や思考といった発言者の主観的な経験を表現する行為が報告者の表現の対象であり、単なる事実や事象の記述とは大いに異なる。このことから生じるさまざまな問題がある。

報告の対象となる元の発話がなされる場とその発話が報告される場はふつう異なる。また、話法の関与者としては報告の対象となる発話をする者〈発言者〉、発言者の発話を報告する者〈報告者〉がある。さらに、〈発言者〉の発話で言及される第三者、報告の受け手が考えられる。本稿では話法の直接的関与者である〈発言者〉と〈報告者〉に注目する。

話法はことばそのもの以外の要因も関わって成立するが、ここでは特に次の二つの要因を取り上げる。

- (i) 発言、および報告の「場」：境遇性に左右される要因で、いわゆるダイクシスのこと。時制、代名詞(日本語の場合は特に人称代名詞)、指示詞、時や場所を表す語句。¹⁾
- (ii) 主観的要素：〈発言者〉の自身の発話(命題)に対する認知的・心理的態度を表す。語順(疑問文・感嘆文)、法表現—ただし、日本語では文末の終助詞で示されることが多い—、日本語の終助詞や敬語表現。²⁾

本論文では、英語と日本語の話法の特徴、英語の自由間接話法とそれに相当する日本語の話法、および Sperber & Wilson の提唱する「関連性理

論」(Relevance Theory) から見た話法に関して検討していく。なお、さらに話法に関しては松尾(1997)を参照されたい。

2. 話法の種類

大まかに言って、話法には直接話法と間接話法とがあるが、さらに細かく区分される。ただし、それぞれの区分の境界は明確ではなく、最も直接的なものから最も間接的なものの中で連続体を成している。

2.1 完全直接話法

元の発話に最も忠実で、音声的特徴などもそのまま残す。外国語や無意味な文であっても、〈報告者〉の理解する言語音である限り伝えられる。

- (1) 「シーッ！」と言って子供たちを黙らせた。—遠藤(1982: 87)

しかし、正確には言語による伝達かどうかという問題があるので、話法としては一般的ではない。

2.2 自由直接話法

伝達部のない、あるいは伝達部が別の文になる直接話法である。思考を報告する場合は〈発言者〉(登場人物)の思考が伝達部なしに現在時制で直接報告される。

- (2) “*Do you love me, Charles?*” She was five hundred miles away in Los Angeles when she asked him. —Asher, *et al.* (1994: 4298)

- (3) 縹色に淡い茶で琉球模様の星を織り出した上布に、濃紺の帯をきりりとしめた。

「もう、いいわよ」

葛代は声をかけた。

「ああ」

また同じような返事をして、長野が振向いた。—高橋治『短夜』

2.3 直接話法

〈発言者〉の発話を他人のことばとして区別し、〈報告者〉が客観的に報告する話法である。直接話法では〈発言者〉の現実の発話が典型的には引用符内に提示され、伝達部に say, ask などの伝達動詞を伴って〈報告者〉が示される。〈報告者〉は〈発言者〉の発話の表現形式や内容に忠実であり、伝達の再生であるといえる。間接話法や自由間接話法と比べると、元の発話状況に最も拘束され、被伝達部、すなわち引用符内は〈発言者〉の視点をとる。ちなみに、日本語には本来引用符はなかった。

- (4) She said, “*You must bring your poor little cat here now, you must!*” —Asher, *et al.* (1994 : 4298)

伝達部は引用部の前、中、後いずれの位置でも用いられる。

- (1) “Do you,” *she asked*, “love me, Charles?” —*ibid.*
(5) “Do you love me,” *she asked*, “Charles?” —*ibid.*

いずれも引用部の中に伝達部が挿入されているが、(5)では *she asked* がこの位置に挿入されることによって ‘Do you’ が強調され、その後実際はポーズがあったことを暗示する。(6)では ‘Charles’ が強調される。また井上 (1988) では、伝達部が引用文中に挿入される場合、会話の流れの中で重要な意味を担っているのは、伝達部が挿入されている部分以降であると述べられている。

2.4 中間話法（日本語）

遠藤 (1982) でいう一般直接話法と修正直接話法のことである。一般直接話法はいわゆる英語の直接話法とほぼ同じである。伝達性の高い、すなわち話し相手に対する働きかけの強い要素が元の発話から変更される。

- (i) 間投詞の削除：場や語調がないと正確な意味の伝わりにくい感情の

直接的表現 [オイ, ホラ, アラなど]

- (ii) 文体的な意味を添えるだけの終助詞の削除 [ゼ, ゾ, ワ, ヨ]
- (iii) 語順修正

(7) 「宝石みたいに綺麗な街ですな, オスロは」—遠藤(1982: 88)

(8) 「オスロは宝石みたいに綺麗な街ですな」と言った。—*ibid.*

修正直接話法は, 引用文の視点を〈発言者〉に残したまま, より簡潔な形に変換される。

- (i) 間投詞の削除が義務的になる。
- (ii) 会話では省略されることの多い助詞 [ハ, フ, ガ] が付加される。
- (iii) 引用文末は通常普通体になる: 発ちます→発つ
- (iv) 話者の意図を表す終助詞は文意に従って変換される: 疑問を表す
～カイ→～カ/カドワカ, 命令を表す～タマエ→～ナサイ/ヨウニ
- (v) 敬語表現の中立化。

ただし, この規則も絶対的なものではなく, 両者を合わせて中間話法としておいた方がわかりやすい。

2.5 自由間接話法(英語)³⁾

自由間接話法は直接話法的要素と間接話法的要素を併せ持つ。〈発言者〉(登場人物)の声と〈報告者〉(語り手)の声が伝達部なしに混交するので, 両者の声の区別は容易ではない。小説で多く見られる意識の流れを表現する手段で, 認識(思考)の報告である。報告される部分(描出文)にはその発話(思考)行為をする〈発言者〉の視点を残しながら, 一方では〈報告者〉の視点をも保っている。なお, 自由間接話法の視点と伝えられるメッセージの二重性に関しては松尾(1997)を参照されたい。

自由間接話法の基本的な特徴は次の通りである。

- (i) 伝達節が省略される。
- (ii) 直接話法の文構造が保持される: 直接疑問文や感嘆文の語順, 付加

疑問文，呼格，間投詞など。

- (iii) 間接話法の要素が保持される：ダイクシスに関わる要素（時制，人称代名詞，指示詞，時や場所を示す語句）。

直接話法的要素として保持されるのは，〈発言者〉の主観や感情を表す語句，間接話法的要素として保持されるのは，発話の，ここでは報告の行われる場面との関連において了解が成り立つダイクシスである。

- (9) Hutton : You all seem to take it for granted that I murdered my wife. First, there's the coroner. *Did I put anything into Emily's medicine?*—Asher, *et al.* (1994 : 1085)

ただし，これらの原則に従わない場合もあり，言語的特徴のみから判断はできず，伝達動詞や認識動詞やそれに類する表現を前後の文脈で用い，そのことによって自由間接話法であるとわかることも多い。

2.6 間接話法

間接話法では〈報告者〉の現在時において〈報告者〉のダイクシスの中心(I/here/now)，すなわち〈報告者〉の視点から対象となる〈発言者〉の発話が伝達される。伝達部は主節に，被伝達部は従属節に現れ，伝達部に伝達動詞や think などの認識動詞を伴って〈報告者〉が示される。伝達の解釈であり，〈報告者〉は報告の内容に対する責任は負うが，〈発言者〉の表現形式に対しては必ずしも忠実である必要はなく，〈報告者〉のスタイルを採用する⁴⁾。1で述べた言い方を用いると，境遇性に左右される語句は全て変換される。

2.7 拡大間接話法/Diegetic Summary

拡大間接話法は，形の上では一般的な間接話法と同じであるが，発話内容を忠実に報告しようとする意図はなく，要旨をまとめて話法にしたものである。Diegetic Summary は最も間接的な様式で，単に発話行為が起

こったことのみを報告する形式である。

3. 日本語の話法の曖昧性

2で話法の種類を述べたが、日本語では英語ほど話法を明確に区別できない。直接話法と間接話法の区別が曖昧である例をあげる。

[A] 時や場所を表す語句は変換されても時制は変換されない（英語では変換される）。

- (10) a. 「あしたここで待っています」
b. 太郎は翌日そこで待っていると言った。
c. Taro said that *he would be waiting there on the following day*.—牧野(1978: 163)

[B] 伝達部と被伝達部との境界が曖昧である。

- (11) だが私の場合、六年前に胸部手術という大厄をすませたから、大丈夫だわ、と妻が言った。—遠藤(1982: 87)

被伝達部の終わりは明らかであるが、始まりがどこかは曖昧である。

[C] 文末表現など

話し手の意図を表す文末表現である程度区別できる。

- (12) a. 明日までにこの仕事をやって下さいと彼は言いました。
b. 明日までにこの仕事をやるようにと彼は言いました。

—Coulmas(1985: 55)

aが直接話法、bが間接話法である。「下さい」は直接話しかける相手が必要な語である。「ように」は「ようにして下さい」の短縮形で、間接話法で命令の法を表す。次は文体的意味を添える終助詞を用いた例である。

-
- (13) a. ホテルの部屋から逃げた人々はまたたく間に黒い煙が充満したと語っている。
b. ホテルの部屋から逃げた人々はまたたく間に黒い煙が充満したよと語っている。—Coulmas(1985: 56)

a は一般的には間接話法であると解釈できるが、直接話法ともとれる。一方、終助詞「よ」が入る b は直接話法の読みしかできない。

- (14) 男の人あてに封筒が届けられるのですが、それを女の人が受け取るわけですね。
- a. その封筒を持って来た人は誰かと聞きます。
b. 男の人が女の人にゆきちゃんこの封筒を持って来たのはどんな男だったとこう聞きます。
c. ゆきちゃんさあ、この封筒を持って来たやつどんな男だった。

—Coulmas(1985: 59)

a は間接話法である。まず、指示詞が変換されている。疑問を表す終助詞「か」は直接話法でも可能であるが、このままでは失礼な言い方で直接話法では「誰ですか」となる方が自然であろう。b は直接話法である。呼びかけ語があること、指示詞が変換されていないこと、伝達部を「こう」で受けていることがその根拠である。c も直接話法である。呼びかけ語、終助詞「さあ」、指示詞からわかる。b, c いずれも直接話法ではあるが、c の方がより直接性が高い。

このように見てくると、日本語の場合直接話法と間接話法の区別は非常に曖昧で、中間話法（あるいは準直接話法）の形式が用いられることが多いといえるのではないか。

4. なぜ英語と比べて日本語の話法は曖昧なのか

3 で日本語の話法が曖昧である実例を見たが、ここではその理由を考え

ていく。なお、[] 内の記号は3で用いたものと原則的に一致する。

[A] 統語的要因

a. 語順, すなわち動詞の位置: 英語ではS+V+Oの語順で動詞が主語の直後に来るが, 日本語では動詞は文末に来る。英語では, 基準となる時制が動詞によって先に決められるので, 文を続ける際, 話し手は主動詞の時制を意識せざるをえない。一方, 日本語では文末になるまで基準となる時制は定まらないので, 被伝達部はとりあえず現在想定として表す。

(15) a. He said, "A woman of your generation is better than a man of mine."

b. 「あなたの世代の女性はぼくの世代の男性より有能なんです」と彼は言った。—大津(1993: 154)

(16) a. He said that a woman of her generation was better than a man of mine.

b. あなたの世代の女性はぼくの世代の男性より有能なんです, と彼は言った。—大津(1993: 155)

(16a) のように英語では被伝達部の動詞で時制の一致が適用されている。

b. 主語の省略: 日本語では文脈から予測できる主語は省略されることが多い。述語に話し手である一人称の主語でしか用いられないもの, たとえば「～たい」などの話し手の心理や感情を表す動詞や形容詞を用いた表現では, 三人称の主語が消去されることが多い。

(17) a. ぼくは禅をもっと深く知りたい。

b. ??スミスさんは禅をもっと深く知りたい。—牧野(1978: 30-31)

(18) a. ぼくは故国を離れているので淋しい。

b. ???スミスさんは故国を離れているので淋しい。—*ibid.*

三人称の主語が消去されて主語がなくなると, 読み手はその述語で表され

る感情を抱いているのは一人称、すなわち〈発言者〉であるかのような錯覚に陥る。そうすると、第三者の思考を表しているはずであるのに〈発言者〉のそれが表されているかのように思える。

c. 「自分」という代名詞：日本語では〈報告者〉が〈発言者〉のことを指して「自分」という語を用いることがある。この「自分」は共感の印で⁹⁾、主語に「自分」が来ると、読み手は〈発言者〉である登場人物に共感しやすくなる。(21)の例を参照されたい。

[B]「と」は元来は他人のことばを報告する印であったが、直接話法でも間接話法でも用いられる。さらに[A]でも述べたように、間接話法の被伝達部では語順も時制も直接話法と同じである。

[C]〈発言者〉の自身の発話(命題)に対する認知的・心理的態度を表す法は日本語では主に文末の終助詞で表される。この表現は〈発言者〉の主観を表すのであるから本来は直接話法の特徴であるが、英語とは異なり日本語では間接話法でも可能である。

[D] 丁寧表現(敬語)：敬語は話し手と聞き手の関係を表すものであるから、〈発言者〉とその発言の聞き手との関係に基づいて用いられる。したがって、直接話法だけで見られる特徴であるといえるが、実際はそうではない。丁寧表現の「～ます」の例を見る。

- (19) a. 彼は私がまた間違いましたと言いました。
b. He said, "I was wrong again."
c. He said that I was wrong again. —Coulmas(1985: 57)

この「私」は二通りに解釈できる。一つはこの文の「彼」を指し、その場合英語にすると(19b)の直接話法になる。もう一つは〈報告者〉を指し、その場合(19c)の間接話法になる。従って、丁寧表現があるからといって

必ずしも直接話法とは限らない。

このように日本語では間接話法でも時制や語順の変換がない、英語ならば直接話法にしか現れない〈発言者〉の心的状態を表す法表現が日本語では間接話法にも現れる、などの理由で両話法の区別が曖昧である。結局のところ、ダイクシスの切り換えが〈発言者〉と〈報告者〉の視点を最も明確に区別する要因であるといえるが⁶⁾、英語とは異なり日本語では文脈や社会的要因といった共有知識に依存するところが大きい。

5. 英語の自由間接話法、日本語の中間話法（準直接話法）

日本語に特徴的な中間話法を英語の自由間接話法と関連づけて考える。まず、冒頭であげた話法に関する二つの要因を思い出して下の表を見ていただきたい。

	ダイクシス	主観的要素
[英語] 自由間接話法	間接話法的	直接話法的
[日本語] 中間話法 (準直接話法)	直接話法的	間接話法的*

* 直接話法的要素が全くないわけではない

このように単純に図式化するのは正確ではないが、おおむね上表のようになる。英語の自由間接話法ではダイクシスは間接話法的、すなわち〈報告者〉の視点のまま動かない。〈報告者〉は〈報告者〉の立場のまま〈発言者〉の主観を報告する。日本語の中間話法ではダイクシスは直接話法的、すなわち〈発言者〉の視点である。この点からも中間話法は準直接話法と呼ぶ方が適当かもしれない。〈報告者〉は〈発言者〉の視点に移動して〈発言者〉の立場で報告するが、一部〈報告者〉のスタイルを採り入れる。日本語は英語に比べて〈発言者〉の視点をとる直接的な表現を好むといえる。

この視点の自由な移動が日本語の特徴である。その結果としてどのようなことが生じるかを次に論じる。

5.1 視点の自由な移動

次は、語り手が登場人物の葛代と語り手としての視点の間を自由に行き来する例である。

(20) 葛代は丁寧に風呂敷をほどき、桐箱の紐を解いた。四隅に和紙で巻いた棒状のクッションが差しこまれ、布に包まれた茶碗は動かないようにしっかりと止められている。

そのクッションを取出し、布を開いた。惚れ惚れとする色合いである。しかも、器体の歪みが良い。作意が感じられずに、円形の安定が破られているところが、凝縮された動きを思わせるのだ。

やはり、甲四郎ならではの出来だ。そう思いながら、葛代は茶碗を裏返した。途端に冷や水を浴びせられたように感じた。

—高橋治『短夜』

下線部は語り手の視点で、現在から過去に起こった事象を述べており、過去形で表されている。波線部は語り手が登場人物の視点に移動し、述べられている事象が起こった過去に逆上り、登場人物の現在として現在形で表されている。英語ではこれほどめまぐるしく視点を変え、異なる時制が入り混じることはきわめて少ない。

次は中間話法の例である。

(21) やがて雲間から青い空がのぞくと… 映子の視界の中にあふれ出した。夫の賢一郎は、今夜も帰宅が遅いのだろう。日曜日の夜、今週はずっと遅くなると賢一郎から聞かされた。来月に大阪で開催される世界貿易フェアの理事の役が今年は自分に回って来たと、夫は愚痴をこぼしていた。—伊集院静『瑠璃を見たひと』

最初の部分は語り手の視点で、地の文になっている。それ以外の部分は中間話法である。直接話法ならば「遅くなる」は「遅くなるよ」、「回って来た」は「回って来たんだ」とでもなるのであろう。地の文は語り手の視点

で表されているが、それ以外では咲子、夫の賢一郎、語り手の声が混交している。

5.2 直接話法的表現を好む日本語

英語では視点の移動が難しいのに対して日本語では自由に移動できるので、日本語では直接話法的表現が好まれる。次例は日本語の原作を英語に翻訳したものであるが、いずれも英語では間接話法的な表現になっている。

- (22) a. その週の土曜日の午後に永沢さんが僕の部屋に来て、よかったら今夜遊びに行かないか、外泊許可はとってやるからと言った。
いいですよ、と僕は言った。—村上春樹『ノルウェイの森』
- b. Saturday afternoon that week, Nagasawa came to my room and asked if *I'd* go out to the town with *him that night*, saying *he'd* arrange the overnight pass. Fine, I told him.
- (23) a. 大御っさんやっぱり嬢さんに婿とる気や、ほや無うてなんであ
ない女学者のよな学問させるもんでよ、と云われたものだ。
—有吉佐和子『紀の川』
- b. Everyone was sure that Toyono planned to adopt a husband into the family. Otherwise, they reasoned, she would not have given her granddaughter the kind of education which was suited only to a woman scholar.

(23 a) では〈発言者〉の音声的特徴が表されているが、(23 b) では〈報告者〉、すなわち語り手のスタイルに完全に同化されている。

5.3 自由間接話法の日本語訳

〈発言者〉と〈報告者〉の声が共存するという点で、英語の自由間接話法は日本語の中間話法と似ている。自由間接話法を日本語にするならば、中間話法的に訳せばよい。中間話法ではダイクシスは直接話法的、すなわち

〈発言者〉の視点であるから、〈報告者〉が〈発言者〉の現在である過去に逆上って報告するので、日本語では現在形で表すことになる。

(24) a. Menley shivered as she reached for the celery. ... There was a sudden noise. *What was that? Had a door blown open? Or a window? Something was wrong.* She snapped off the radio. *The baby! Was she crying? Was that a cry of a muffled, gagging sound?* —Clark, *Remember Me*

b. メンリーはセロリに手を伸ばしたとき身震いした。… 突然音がした。何だろう？ 風でドアが開いたのだろうか？ いや、窓かしら？ 何か変だ。彼女はラジオを切った。赤ん坊だわ！ 泣いているのかしら？ 泣き声かしら、それとも息でも詰まったのかしら？

これは嵐の日、メンリーが赤ん坊と二人で夫の帰りを待ちわびている場面である。彼女は事故で幼い息子を失ってから精神的に不安定な状態にある上、この家では奇妙なことが続発していた。自由間接話法にすることによって、また日本語では現在形にすることによって、読み手はメンリーと一体化し、彼女と同じ視点に立ち、恐怖感を共有しているような臨場感あふれる描写になる。

6. 「関連性理論」から話法をみる

6.1 解釈的用法としての話法

「関連性理論」によると、発話は話し手の思考を表記するために用いられ、記述的 (descriptive) 表記と解釈的 (interpretive) 表記とがある。記述的表記とは現実世界の事象を記述するもので、解釈的表記とは他の命題形式、すなわち (誰かに) 帰属された (attributed) 思考の解釈を表記するものである。さらに、発話の解釈的用法とはことばや思考の報告、すなわちある発話が別の発話や思考を報告するために用いられる場合をいう。話法は全

て解釈的用法である。また、「エコ-発話」とは解釈的用法の一種で、話し手が第三者の思考を思い浮かべ、それに対して自分が何らかの態度を抱いていることを伝達する発話のことで、英語の自由間接話法と日本語の中間話法がそれに該当する。

「関連性理論」から話法を詳しくみる。まず、直接話法に該当する例である。

(25) Peter : And what did the inn-keeper say?

Mary : Je l'ai cherche partout!

—Sperber & Wilson(1986, 1995² : 227)

Mary は宿屋の主人のフランス語の発話を報告している。Mary は自分の発話の命題形式を伝えているのではなく、主人の発話と類似⁷⁾しているからこの発話をしている。直接話法は何かを描写するのではなく、類似しているものを表示するために用いられ、言語形式、意味構造と命題形式が主人の発話と類似している。

次は自由間接話法、および中間話法に該当する例である。

(26) Peter : And what did the inn-keeper say?

Mary : I looked it for it everywhere.

—Sperber & Wilson(1986, 1995² : 228)

Mary の発話は宿屋の主人の発話の翻訳で、意味構造と命題形式が主人の発話と類似している。ただし、英語の場合はダイクシスが間接話法的であるので、必ずしも意味構造がそっくり類似しているとは限らない。

次は間接話法に該当する例である。

(27) Peter : And what did the inn-keeper say?

Mary : He has looked for your wallet everywhere. I don't

believe him. —*ibid.*

Mary の発話は代名詞が異なるなど、意味構造は宿屋の主人の発話と異なるが、命題形式は類似している。このようにある表示が全く同じ命題形式をもつ別の表示文を表すために用いられるとき、それは解釈の極端な例であるといえる。

下表は、それぞれの話法の特徴をまとめたものである。

	直接話法	中間話法	自由間接話法	間接話法
言語形式	○	×	×	×
意味構造	○	○	△	×
命題形式	○	○	○	○

○：類似 ×：類似していない

△：両者の中間

6.2 エコー発話としての自由間接話法，中間話法

自由間接話法と中間話法はエコー発話の一種である。両者とも〈報告者〉が〈発言者〉の**ことば**をエコーしている。ただし、両者に多少の違いがある。

自由間接話法はダイクシスは間接話法的、すなわち〈報告者〉の視点は移動しないので、〈報告者〉は〈報告者〉の立場のまま〈発言者〉の**ことば**を報告する。〈報告者〉は〈発言者〉の**ことば**をエコーすることによって〈発言者〉の**ことば**の内容を客観的に報告すると同時に、〈発言者〉の**ことば**に対する〈報告者〉の態度（アイロニー、共感など）をも表す。すなわち、自由間接話法は視点とメッセージの二重性を有する⁸⁾。

中間話法はダイクシスは直接話法的、すなわち〈報告者〉の視点が移動するので、〈報告者〉は〈発言者〉の視点に移動して〈発言者〉の立場で〈発言者〉の**ことば**を報告するが、一部〈報告者〉のスタイルを採り入れる。しかし、英語の自由間接話法と比較すると、〈報告者〉は〈発言者〉の視点

にかなり入り込むので登場人物と一体化し、共感を表すことは得意であるが（いわゆる意識の流れ）、〈報告者〉が〈発言者〉のことばに対して距離を置いたアイロニーなどの態度は表現されにくい。中間話法が自由間接話法よりも直接話法的であることは前節の表からも明らかである。

7. おわりに

以上、英語と日本語の話法の特徴を述べ、比較し、日本語の話法の曖昧性を論じた。また、英語の自由間接話法と日本語の中間話法との相違点を明らかにした。さらに、話法を「関連性理論」の観点から再考した。

注

- 1) 話し相手が必要な呼びかけ語、付加疑問文など。
- 2) 談話辞、不完全文、繰り返し、音声の特徴など。
- 3) 自由間接話法 (free indirect speech) には他に次のような呼び方がある。描出話法 (represented speech), 自由間接体 (style indirect libre, free indirect style), 間接話法独立形 (independent form of direct discourse), 体験話法 (erlebte Rede)。
- 4) 間接話法の被伝達部に現れる〈報告者〉の主観には度合いがある。
Jim said that Sachiko *was* [is] beautiful. —Coulmas (1985 : 42)
被伝達部に *was* が用いられる場合は主節の動詞と時制が一致しており、単なる Jim のことばの報告である。is が用いられるとサチコが美人であるという〈報告者〉の主観が入っている。
- 5) Kuno, S. & Kaburaki, E. (1977) "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8 : 4, 627-672.
- 6) 日本語では語順や時制の変換がないので、直接話法と間接話法の区別は一方ではダイクシスの変換、他方では話し手と聞き手の関係などに基づく (Coulmas 1985 : 56)。
- 7) 「類似性」は関連性理論において重要な概念である。これは、どんなものでも少なくともどこか何かに似ている可能性がある (Sperber & Wilson 1986, 1995² : 232) ということをよりどころとする。写真や絵などを実物の代わりに用いて示すこともできるし、地図によって実際の道順を示すこともできる。これを一般化すれば、発話も話し手の思考の代わりとなるといえる。また、「類似性」には程度があり、同一性は類似性の極端な例である。

8) 松尾(1997)参照。

引用作品

- 有吉佐和子『紀の川』新潮文庫。
Ariyoshi,S. 1981. *The River Ki*. trans. by Tahara, M. Kodansha International.
Clark,M.H. 1994. *Remember Me*. Pocekt Books.
伊集院静『瑠璃を見たひと』角川文庫。
村上春樹『ノルウェイの森』講談社。
Murakami,H. 1989. *Norwegian Wood*. trans. by Birnbaum, A. Kodansha International.
高橋治『短夜』新潮文庫。

参考文献

- 荒木一雄, 安井稔編. 1982. 『現代英文法辞典』三省堂。
Asher,R.E., et al. eds. 1994. *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. Pergamon Press.
Banfield,A. 1973. "Narrative style and the grammar of direct and indirect speech." *Foundations of Language* 10,1-39.
Coulmas,F. 1985. "Direct and Indirect Speech : General Problems and Problems of Japanese." *Journal of Pragmatics* 9,41-63.
遠藤裕子 1982 「日本語の話法」『言語』11(3),86-94。
井上永幸 1988 「挿入節としての直接話法伝達部」六甲英語学研究会(編)『現代の言語研究』275-286。金星堂。
牧野成一 1978 『ことばと空間』東海大学出版会。
松尾文子 1997 「話法で何が伝えられるか—直接話法, 間接話法, エコー発話としての自由間接話法」『梅光女学院大学公開講座論集 第40集』笠間書院。
McHale,B. 1978. "Free Indirect Discourse : A Survey of Recent Accounts." *A Journal of Descriptive Poets and Theory of Literature* 3,249-287.
中川ゆきこ 1983 『自由間接話法』あぼろん社。
中島文雄 1987 『日本語の構造』岩波書店。
大津栄一郎 1993 『英語の感覚(上)』岩波書店。
サイデンステッカー,E.G.,安西徹雄 1983 「日本文の翻訳」『スタンダード英語講座(2)』大修館書店。
Sperber,D. and D.Wilson. 1986, 1995². *Relevance : Communication and Cognition*. Blackwell.
Sternberg,M. 1982. "Point of View and the Indirectness of Direct Speech." *Language and style* 15,67-117.

Sternberg, M. 1982. "Proteus in Quotation-Land." *Poetics Today* 3:2, 107-156.

Yamaguchi, H. 1989. "On 'Unspeakable Sentences': A Pragmatic Review." *Journal of Pragmatics* 13, 577-596.